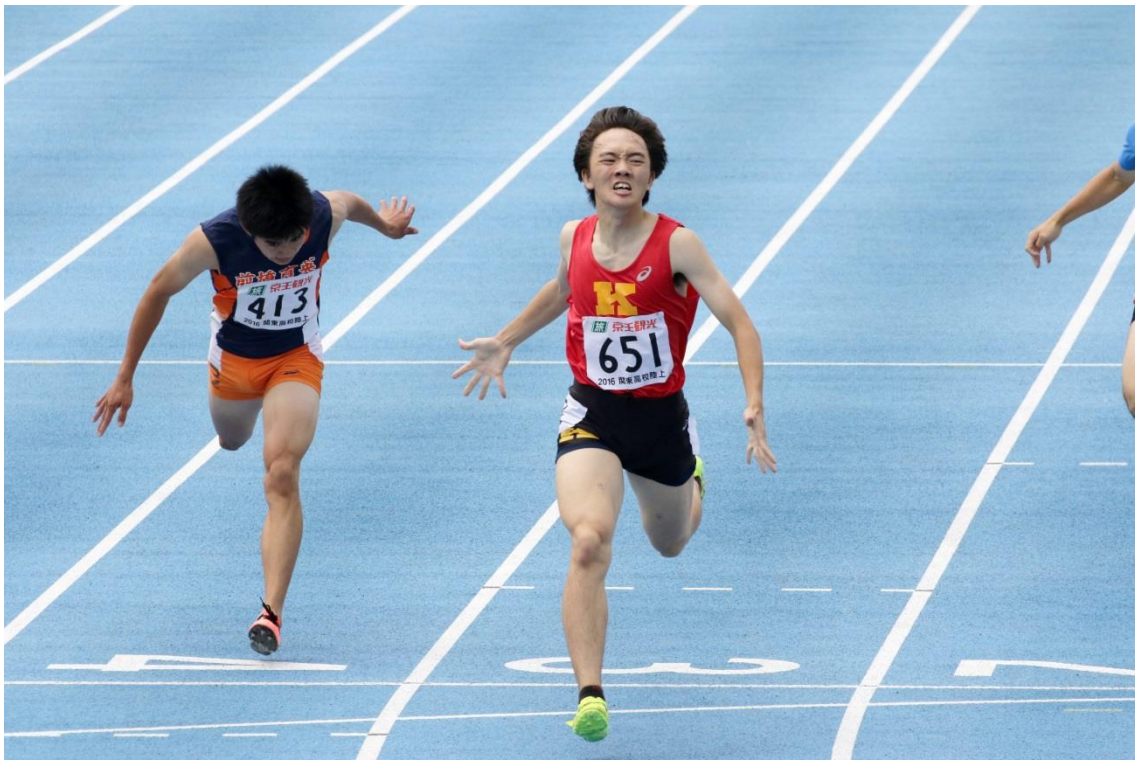
★春陸９年ぶりの４００m関東制覇



私が神奈川等々力競技場に行くのは１０年ぶりである。
やはりあの時も雨だった。２００６年、後藤乃毅らの年。
梅雨時の関東以外この競技場を知らないので、「神奈川特有の風が舞って記録の出にくい場所」というイメージが強い。
春陸は、翌年の２００７年小瀬で高島が５０００mW関東優勝。
毎年のように春陸は入賞を重ねてはいるが、そろそろ関東で優勝して競技場に「赤い風」を吹かせてみたい。

しかしハードルや長距離のように、勢い込んで着外や転倒などリスクは避けたい。(昨年の 3000ＳＣ青木だって通過すればいいので優勝を狙ってこけてはいけなかった)・・優勝を意識し、緊張してミスや転倒がおきにくい競技・・・したがって関東優勝の可能性が高いのは短距離のフラットレースだと思っていた。
昨年の県新人で４００m優勝している鈴木雄太はその筆頭。
しかし春の学総で６位と絶不調であったため、これが幸いして関東勢からノーマークだったのは幸いした。
鈴木は、昨年の学総（２年生になりたて）の準決勝で、すでに４８秒台をマークしていたので、実力はトップクラスなのは間違いなかった。
学総の決勝は「痙攣」・・・涙をのんだ。本来なら和歌山インターハイ出場も可

能だった彼自身、今年は昨年の悔しさを払拭したい

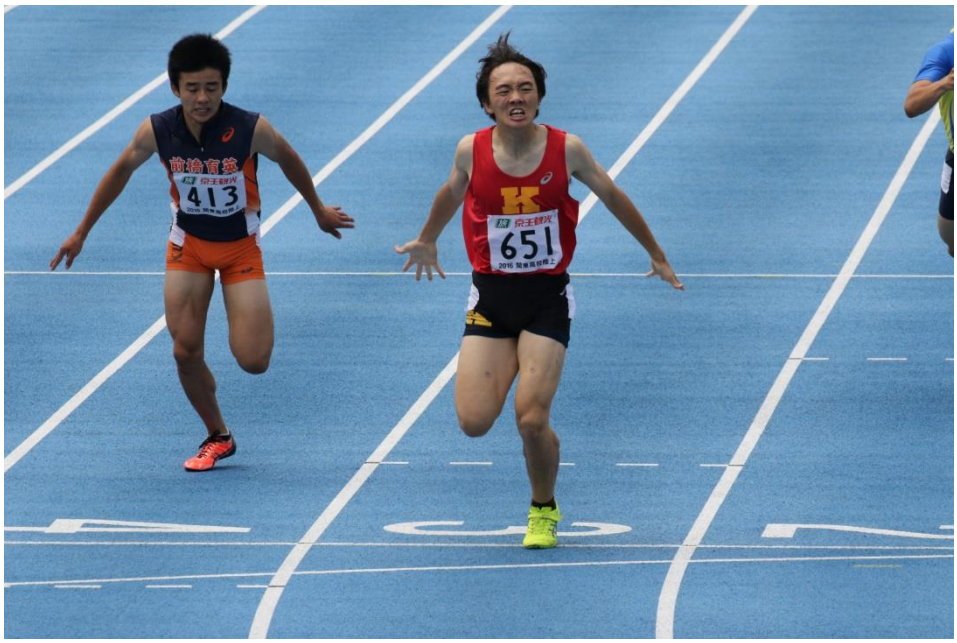
★関東予選から好調の鈴木は好調。
雨空の悪環境で、４８秒３９で予選を通過。
自己新記録だ。
決勝でのさらなる自己記録を予想させた。
記録は出にくいので順位を期待したい。

決勝では、「この競技場は風が舞って、かつ雨交じりで記録は出ない。先行飛ばしすぎず、ラスト５０ｍで逆転できる余力を残していこう」という秋庭先生の作戦だった。

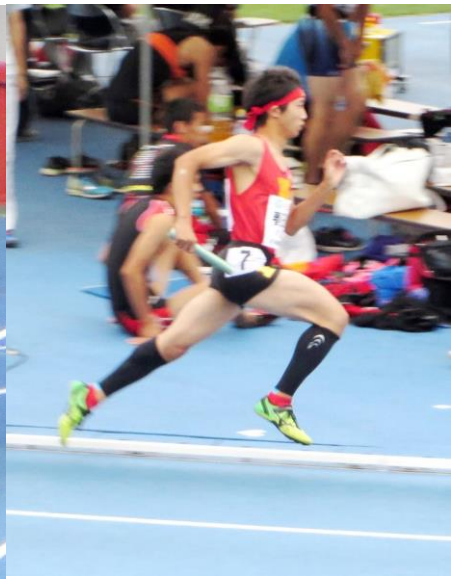
決勝は３００ｍまで鈴木は２位につけた。

予想通りホームストレートで先頭が向かい風でペースダウン。
そこを捕らえての見事な逆転ゴールであった。
春陸、関東ではこの種目２０年ぶりの優勝。短距離では後藤の１００ｍ以来１０年ぶり、トラック種目では高島の５０００ｍW以来９年ぶりとなる関東総体制覇であった。

記録は自己新記録の４８秒０９．春陸歴代３位。グラウンドコンディションは極めて悪かったので、関東優勝というポジションからして４７秒台相当の実力だと思われる。



★春歴３位の１６００ｍＲチーム
岸田、内田、武田、鈴木のメンバーは３分１７秒６４のタイムを持つ。
大会ランキングも混戦。県の決勝でも６位の大接戦だった。
例えばこの記録なら１０年前は余裕の通過。しかし、昨今は参加各々の記録が切迫して狭い間にひしめいている状態だ。県で勝っても、関東で下位選手に逆転負けなどなんら珍しい事ではない。
結果は３分１８秒６７で惜しくも全体９番目であった。しかし関東本番でチームベストに１秒と迫ったすばらしいチームであった。
関東の舞台は高校生の精神に極限の緊張を生む。他高校で、バトンパスで緊張のあまりよろけるチームもあったほど。緊張しないわけがない。



このマイルで２年生の武田凱は貴重な出場経験を積んだ。順当にいけば来年は４００ｍＨ５３秒台をすでにマークしている群馬勢と戦う事になるだろう。
後に主将になる渡辺もサブトラックで視線は来季を見ていたようだ。
入念なイメージトレーニングを行っていた。実際に関東の雰囲気を味わうというのは「初出場」よりはるかに優位に立てるのは間違いないだろう。

★２０年ぶりの４００ｍインターハイ
岡山競技場は春高にとって縁起がいい場所。
奥谷先輩（１９７７年）は４００ｍ、４００ｍＨで入賞しているし、後藤乃毅は国体で入賞している。
やはり個人出場だった鈴木はかなり緊張していた様子。マイルも参加したかったが、それはどのチームも考えている。
昨今、高校生の上位はトレーニング技術の向上によって、平均が上方へ推移し、僅差化している。「インターハイ優勝候補筆頭」・・・でもなければ、上位はひしめきあっている状態だ。
鈴木は総体ランク２２位。つまり４７秒台以上が２０人以上いるのだ。

予選５組　鈴木は最初から飛ばした。スタートリアクションタイム０，１６１秒が示すように組ではトップの速さ。さらにラスト５０ｍをまくった。
結果は４９秒０３　見事５着であった。
長雨続きの東日本と違って酷暑の西日本。ランクからして最初様子を見ていては絶対に通過できないと正しい判断をした鈴木。
その勇敢なる攻めの４００ｍに賞賛を贈りたい。
今回、診療日で会場に行けなかった部分の写真を神奈川の名門・希望ヶ丘高校陸上競技部ＯＢ会、木谷様より頂戴しました。心からお礼申し上げます。
筆　３７回　野本